

令和6年度第3回八戸市美術館運営協議会
会 議 録

日 時： 令和7年3月21日（金） 13：00～15：20

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

会 議 録

日 時： 令和7年3月21日（金） 13：00～15：20

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

出席者： 別紙のとおり

発言内容：

○事務局： 定刻になりましたので、只今から、令和6年度 第3回八戸市美術館運営協議会を開会いたします。会議に先立ちまして、観光文化スポーツ部長の工藤から挨拶を申し上げます。

○部長： 観光文化スポーツ部長の工藤です。本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。今年度3回目の運営協議会となりますが、中期評価報告書や中期運営計画案について皆さんの率直なご意見を伺えればと思っております。先週は、日本文化政策学会研究大会が開催され、北海道から沖縄まで200名を超える方々にご参加いただきました。地方開催にもかかわらず、非常に多くの方が来てくださったと聞いています。エクスカッションでは、館鼻岸壁朝市など八戸市の見どころも楽しんでいただきました。私自身もいくつかお話を伺い、大変勉強になりました。今回、八戸で初めての開催となり、八戸の魅力を皆さんに知っていただけたことを本当に嬉しく思います。これがきっかけで、いつか八戸市がさらに話題になっていくことを願っております。本日は、どうぞ忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

○事務局： ありがとうございます。なお、工藤部長と下村次長は次の予定がございますので、誠に申し訳ありませんが、ここで退席をさせていただきます。次に、本日の会議の出席者のご紹介でございますが、恐れ入りますが、紹介はお手元にお配りしている出席者名簿および席図をもってかえさせていただきますので、よろしくお願いいたします。なお、本日は、坂本副会長、伊藤委員、熊倉委員、志賀野委員、三澤委員がご欠席となっております。また、本会議は、八戸市美術館運営協議会規則第4条第2項により、委員の過半数が出席しているため、成立していることを報告します。なお、会議の公開・非公開についてですが、八戸市附属機関の設置及び運営に関する要綱の第5条第2項におきまして、個人のプライバシー又は政策形成過程における情報などに係る審議内容で、公開することにより当該附属機関の適正な議事運営に著しい支障が生ずるおそれがある場合を除き、会議を公開することとされております。このため、本日は報道関係者による傍聴・取材を受け付けております。また、会議後に作成した議事録は、発言者名を伏せてホームページなどで公開させていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは、ここからの議事進行は、日比野会長にお願いいたします。

◆会長： 本日は案件として、第1期八戸市美術館中期評価報告書および第2期八戸市美術館中期運営計画（案）に関する内容がございます。時の流れは早いもので、第2期の中期運営計画ということで、地域住民や多くの方々に八戸市美術館の存在が認知されてきたように感じております。つい先日、熊倉委員が中心となって開催

された日本文化政策学会研究大会は、とても素晴らしい大会だったと話を伺いました。日本中のアーツカウンシル関係者が八戸に集まって、八戸市美術館を拠点として、八戸の人々の心や街の魅力を体感いただけたようで、大変意義深いことだったと思います。また、先ほど拝見した山本耕一郎さんの「うわさプロジェクト mini」も非常に印象的でした。ジャイアントルームでのプロジェクトやホワイトキューブでの展覧会「八戸アーティストファイル 2025」など、アートの幅を広げ、創造力を刺激する新たな表現が生まれており、地元らしい作家たちがこんなにもいるのかと改めて感じさせられました。それでは、次第に従いまして進めさせていただきます。はじめに、報告案件①「第1期八戸市美術館中期評価報告書について」、事務局から説明をお願いします。

報告① 第1期八戸市美術館中期評価報告書について

○館長： 最初に、第1期八戸市美術館中期評価報告書について説明いたします。資料1をご覧ください。昨年10月の第2回会議において既にお話ししておりますので、今回はポイントを簡潔にご説明いたします。本報告書は、令和3年度から令和6年度までの期間を対象とした中期運営計画の評価をまとめたものです。これは、次期中期運営計画を策定するための評価として実施したものであり、令和3年度から令和5年度までの3年間の取組を整理した内容となっています。報告書の詳細については、前回ご説明した内容と重複する部分が多いため、今回は主なポイントのみお伝えします。38ページに総合評価と今後の展望に関する記述があります。39ページでは、それぞれの中間アウトカムについて概ね達成されていると評価できる内容となっております。41ページでは、リニューアルオープン以降に実施した各事業の成果を踏まえ、中期運営計画で定めた中間アウトカムがいずれも概ね達成されているという評価が示されています。最後に、42ページの今後の展望については、事業活動の課題として、魅力的な展覧会などの実施、プロジェクトの常設展示・コレクション化、学校連携事業の更なる推進、大学・高専連携事業の更なる推進、アートファーマーや共創パートナーを中心とした市民による多様な芸術文化活動創出に向けた仕組みの構築、戦略的な広報となっておりまして、これらの課題は、後ほど議題になる、第2期中期運営計画に向けた課題設定となるような形で報告書をまとめております。なお、本報告書の評価期間は中期運営計画とずれがあるため、令和6年度の評価を加えた最終的な評価報告書を、来年度に改めて取りまとめを行う予定です。以上となります。

◆会長： ありがとうございます。ただいまのご説明は、中期評価に関する報告でした。この評価結果を踏まえ、令和7年度から始まる第2期中期運営計画に活かしていくことになります。委員の皆さまからのご意見などについては、後ほどまとめて伺いたいと思っておりますので、その際によりしくお願いいたします。次に、報告案件②「令和6年度事業の実施状況について」、事務局から説明をお願いします。

報告②令和6年度事業の実施状況について

○館長： 続きまして、資料2-1「令和6年度事業の実施状況」についてご説明いたします。本資料には、令和6年度の実施状況や数値的なデータを最初にまとめております。

入館者数に関しては、令和6年度の集計が2月28日時点で11万8,430人となっております。この人数には、ジャイアントルームを含めた無料エリアの来館者も含まれております。開館からの累計入館者数は34万3,505人です。次に、展覧会の開催状況に関するデータで、企画展および巡回展の観覧者数は3万8,926人で、これは4つの展覧会の合計数です。満足度に関するアンケート結果につきましては、「とても満足」および「満足」の回答を合わせた割合は、いずれも9割近くに達しております。観覧者の年齢別割合や居住地別割合がございしますが、すべての展覧会や無料入場者を対象に調査したものではなく、展覧会の来場者に限ったデータで、県外からの来館者は28%となっております。2ページ目には、コレクションラボや共催による展示の概要を記載しております。実際の活動内容については、写真も交えながらご紹介いたします。4月には、「展示室の冒険」と題したコレクション展示を行いました。展覧会の構成に工夫を凝らし、ゲームブックのように、来場者が自分の好きな絵を選びながら進められるような仕掛けを取り入れました。続いては巡回展、「tupera tupera のかおてん。」という子ども向けの展覧会で、アーティストの tupera tupera に関する展示を行いました。企画展としては「風のなかを飛ぶ種子 青森の教育版画」を開催しました。これは当館の教育版画コレクションを中心に、青森県内の多様な教育活動における版画作品を紹介したもので、前回の協議会でもご覧になった方が多いかと存じます。この展覧会では、約50年前の子どもたちの作品を起点とし、現在の子どもたちとアーティストの共同制作として THE COPY TRAVELERS の3人を招き、小学生を対象としたプロジェクトを実施しました。また、関連企画として、haruka nakamura さんによるピアノ演奏イベントを展示室内で実施いたしました。また、昨年11月は開館3周年を迎え、それを記念したアーカイブ展も開催しております。現在開催中の展覧会は、「八戸アーティストファイル2025」です。八戸にゆかりのある8名のアーティストを紹介する展覧会で、美術館側がアーティストに関する情報を持つプレゼンターを選び、その方々が推薦したアーティストを紹介するという形式で実施しています。コレクションラボでは、今年度4つの企画を実施しました。1つ目は「大久保景造と八戸文化」で、画家としてだけでなく、詩作や市民オペラの台本執筆、「アミューズ」という地元雑誌の編集など、多彩な活動を紹介する展覧会でした。2つ目の「彩る書」では、館所蔵の書作品を展示し、筆を使ったワークショップを通じて、単に見るだけでなく、書の関わりを持てるような展覧会として展開しました。3つ目は「リビングルーム」で、展示室内にソファやダイニングテーブルなどを設置し、自宅のリビングで絵画を楽しむような空間をつくり出しました。現在展示しているのは、南部菱刺しの作家西野こよさんによる新収蔵作品展です。次に、共催事業に移ります。帆風美術館との共催による「新春屏風展」を実施し、複製した屏風をジャイアントルームの自然光の下に展示しました。これに関連するイベントも複数開催しました。また、俊文書道会の発表会では、ジャイアントルームにおいて、俊文書道会と八戸東高校書道部のコラボにより書のパフォーマンスも実施しています。プロジェクトとしては、「AOMORIGOKAN アート

フェス 2024」に参加し、「エンジョイ！アートファーム!!」を実施しました。漆畑委員も交えた5人のアーティストが滞在し、来館者と交流しながら制作や共同活動を行う、当館らしいプロジェクトとなりました。「建築ツアーガイド」は開館当初から続けているプログラムで、アートファーマーがそれぞれの視点で当館の建築を紹介しています。月に1回、毎月最終土曜日に実施しております。きむらとしろうじんじんさんによる「野点」プロジェクトも行われ、今年度は南部町の剣吉駅前で開催しました。南部町役場の職員にも協力いただき、地域とのつながりを深めた活動となりました。今年度新たに開始した「美術館広報部」では、アートファーマーの視点から美術館の魅力を発信する活動を開始しました。今年度は広報動画が完成し、今後も継続していく予定です。「あそらぼ」は3年目を迎えた企画で、マーティー松橋さんを中心に、小学生などが集まってダンボールでゲームを作成し、来館者と交流しながら運営を行いました。昨日、各プロジェクトに関わるアートファーマーが一堂に会し、今年度の活動を振り返る「アートファーマーミーティング 2025」も開催しました。現在進行中のプロジェクトとしては、「八戸アーティストファイル 2025」の一環で、山本耕一郎さんによる「うわさプロジェクト mini」をジャイアントルームで展開しています。バッジ制作などもアートファーマーが日々行っています。学校連携事業についてですが、今年度は学校現場へ出向き、対話型鑑賞の出張研修や、教育版画展に関連した出張授業などを小中学校、高校で行いました。また、例年は埼玉県内で開催している「はみ出す力展」を、今年度は八戸で開催いたしました。各地の保育園、幼稚園、小中高校、大学などで行われた造形美術の授業の実践を紹介する展覧会で、三澤委員のご協力もあり、今年1月に当館ギャラリーを中心に実施されました。

○事務局：ここからは、私のほうでご紹介させていただきます。大学・高専連携事業として、3校連携創作体験ワークショップを開催しました。これは、誰もが気軽に訪れることができる美術館について考えることを目的とし、美術とは異なる分野の教員を講師として招いたワークショップです。八戸学院大学、八戸工業大学、八戸高専の3校の教員が講師を務め、美術館のアクセシビリティをテーマにしたワークショップを実施しました。まず、写真の左側にあるのが「アートな吹流し制作ワークショップ」です。こちらは八戸学院大学短期大学部幼児保育学科の池田先生が担当されました。2番目の写真は「音のなる絵本を創ろう」というワークショップで、八戸工業大学工学部工学科の桶本まどか先生によるものです。パワーポイントを使って親子で絵本を制作する内容で、多くの方にご参加いただきました。右側の写真は「ブリリアント・ミネラル」というワークショップで、八戸工業高等専門学校の土屋校長先生が自ら講師を務められました。こちらは昨年に引き続き開催され、多くの方が楽しく参加してくださいました。次の写真は、「Accessibility（アクセシビリティ）向上実践会議」の様子です。全3回にわたり、東京都庭園美術館の大谷学芸員を講師に迎えて美術館の利用しやすさを考えるワークショップを行いました。また、八戸学院大学短期大学部では、託児サービスとハッピーファミリーアワーを実施しました。写真の右側には、ちょうど

5 館アートフェスの開催時期と重なったため、学生と一緒に子どもたちが遊んでいる様子が写っています。次に、賑わい創出事業についてですが、美術館に訪れたことがない方や、美術館とは縁遠いと思われる市民向けに、美術分野にとらわれず集客力のあるイベントを実施し、美術館をより身近に感じてもらうことを目的としています。今年度は7件の事業を実施しました。その中の一つ、「はちのへ 木の魅力たっぷりおもちゃフェスティバル」では、アーティストの木村勝一さんがツリーハウスをジャイアントルームで制作しました。その前で読み聞かせを行い、子どもたちが熱心に聞いていました。また、ヨルニワという音楽イベントを開催し、大変賑わいました。6、7月と9、10月にジャズの演奏をしました。次の写真は八戸えんぶりを鑑賞している様子です。冬の寒さを避け、美術館内で多くの方にご覧いただきました。続いての写真は、日本文化政策学会の年次研究大会の様子です。今年度の収集管理について、5月27日に八戸市美術館美術品等収集委員会を開催し、新規収蔵作品として18点を収蔵しました。続きまして、貸館利用については、特別貸館として、八戸工業大学第二高等学校美術コースの作品展がホワイトキューブで開催されました。1月31日から2月2日までの期間、多くの作品が展示されました。また、ブラックキューブでは、障がい福祉課が寄贈を受けた「スヌーズレン」という、障がいのある方が落ち着いて過ごせるようにつくられたアイテムをお披露目しました。一般貸館利用は91件にのぼり、写真にあるのは漆畑委員が所属する東光会絵画教室の様子です。次に、「気になる自閉症の世界 Ao」展の様子が掲載されています。これは文化創造推進課のはちのへ文化のまちづくり推進事業補助金を活用して開催されました。次に、「シン・クレイジーバスツアー」の様子が掲載されています。これは市民連携推進課で開催している女性チャレンジ講座の一環で、今年度の受講生が企画して実現されたものです。次に、俊文書道会の書道の展覧会と、「MONO Qloom papel」のペーパーフラワーの展覧会の様子が掲載されています。次に、書文化研究寄遠會「求」展では、高専の学生がタブレットと水で書道を体験できるシステムを開発し、市民の皆さんに試してもらうモニター体験が行われました。次に、「親子で楽しむ絵本ワークショップ ネコでたのしむ物語の世界」の様子が掲載されています。これは、視覚だけに頼らず展示を楽しむユニバーサルミュージアムの試みで、広瀬浩二郎先生をお招きし、手で感じて楽しむ体験を提供しました。次に、八戸工業大学感性デザイン学部の卒業制作展が2月18日に開催され、ジャイアントルームとスタジオを使用して、多くの方に楽しんでいただきました。さらに、マチナカまるっと一日体験事業として、高校生・中学生が美術館やブックセンター、はっちとYSアリーナの4か所で館長やスタッフ体験を行いました。右下の写真には、高校生一日館長の二人が監督となり動画を撮影する様子が写っています。この動画はYouTubeで公開されていますので、ぜひご覧ください。スライドはこれで終わりになります。資料に戻っていただいて、学校団体見学・視察・団体旅行ツアー受入れ状況についてですが、今年度は多くの方がお見えになりました。中心街への波及効果ということで、来館者にアンケートをお願いしたのですが、中心街

施設やサービスを利用した方が64%ということで7割以上の方が千円以上を消費しているという回答が得られています。アンケートに関しましては、昨年度は回答数が少ないというご指摘がありましたし、私達も自覚しているところでしたが、今年度は2月末で841人から回答を得ております。

資料2-1は以上となります。続きまして、資料2-2を説明させていただきます。6年度の来館者動向報告ということで、概要版をお手元に配布させていただいております。入館者数は11万8,430人です。観覧者数は3万8,926人ということで2月末現在の数字です。こちらは有料の展覧会でのカウントでございまして、コレクションやギャラリーでの展覧会の観覧数は含んでおりません。夏休み期間に子ども向けの展覧会「tupera tuperaのかおてん。」を開催したところ、目標値である9万人を上回りました。かおてんは、これまでに一番お客様が入った展覧会となります。続きまして、観覧者の居住地別割合になりますが、特別貸館のかおてんの数は含んでおりませんのでご了承ください。八戸市内が42.8%、青森県内が28.3%、青森県外が14.7%ということで、約3割が県外から来館しております。アンケートの方は後でお読みいただければと思います。続きまして、資料2-3の令和6年度アンケート調査概要版になります。まず、「来館した動機は何ですか」という質問に対しては、「企画展を見るため」が480件と最も多く、次に「美術に興味や関心あるから」、次に「美術館の建物・建築に興味があったから」、次に「新しい美術館を見てみたかったから」、という回答が得られています。次に、「見に行きたいと思うジャンルはなんですか」という質問に対しては、現代アートが340件と最も多く、次いで写真、西洋画、絵本、デザインという順になっておりました。昨年度は現代アートという回答が多かったのですが、アンケート調査の時期が現代アートの展覧会と重なっていたことが理由かなと推測しておりましたが、今年度も同様の結果でしたので、現代アートはやはり人気があるのではないかと思います。続きまして、展覧会満足度ですが、とても満足と満足を含めたパーセンテージは80%以上ということで、ちょっと遠慮がちに書いているんですけど、実際88%ということで、9割近い方が満足してお帰りになられたということです。続きまして、資料2-4アートファーマーアンケート結果になります。回答者数が15人ということですが、とても内容が濃いことを皆さん書いてくださっています。「どのようなことを期待して、プロジェクトに参加しましたか」という質問に対する主な意見とすると、「ひととコミュニティを築くこと」、「自分の将来に活かせること」、「美術館に観覧者以外のかたちで関わること」などというさまざまなご意見をいただいております。次に、「具体的にどのような場面で創造力が刺激されましたか」という質問では、「皆さんといろいろな観点で美術について話したこと」ですとか、「版画展や習字の展示を見てもっと八戸の福祉について学びたいと思った」などご意見をいただきました。次に、「具体的にどのような学びがありましたか」という質問には、「初めて会う人同士でもアートを通して楽しく盛り上がった」、「具体的にどのような面で理解が深まりましたか」という質問には、「アーティストさんやプロジェクトメンバーとのかかわりは特に多様性を考え

る意味では、家と会社の往復だけでは得られない経験だと思います」という回答だったり、「アートファーマープロジェクトをきっかけに、放送大学の専科履修生として入学しました」など、人生、進路も変わるような、そういう出会いをしてくださっています。次に、「プロジェクトに参加して、最も印象に残っていることを教えてください」という質問では、「今年度は、プロジェクトを通じて知り合った皆さんとの新たな関係性が最も印象に残っています」とご意見をいただいております。次に、「具体的にどのようなことに取り組んでいますか」という質問では、「何でもやってみよう！という気持ちが生まれて、趣味の幅が広がりました」とか、「公民館で子どもたちと、サポートする大人と一緒に「白マドの灯」の地域で映画上映する自主クラブを立ち上げることにした。地域の子どもたちが地域の人のために活動するサポートしたいと思い、自主クラブを考えた」ということで、もう行動に踏み出している方もいらっしゃいました。次に、「アートファーマーとして継続的に活動しようと思ったのはなぜですか」という質問では、「楽しかったから！というのがいちばん。そして学びや発見がたくさんあるからです」、「さまざまなジャンルの人々と関わり自分の制作活動に役立てたいと思ったから」、「楽しいから」、「好きだから」というような感想がたくさん得られております。次に、「継続的に活動することで、自身にどのような変化がありましたか」という質問では、「新しいものへの意欲が増えたことはもちろん、継続的な参加で変化、進化していくものへの感動が大きくて、それに感情を動かされて行動へ、ということが多かったです」とか、「仕事にも自信がついてきた」とか、「刺激があり、ワクワク、楽しい」というような意見がありました。次に、「あなたにとってアートファーマープロジェクトがどういうものですか」という質問では、「知らない世界を見せてくれるきっかけとなるもの」、「新しい学びがたくさん見つかる場所」、「日々の楽しみであり、生きがい」、「学びの場」、「刺激的な楽しいもの」など、そういった回答が得られているところです。以上説明を終わります。

◆会長：

ありがとうございました。令和6年度事業の実施状況についてですが、今回も企画展やジャイアントルームでの活動、アートファーマープロジェクト、そして貸館利用など、多彩でバラエティに富んだ活動が報告されました。このあと、委員の皆さまには、引き続き次の議題についてもご意見をいただければと存じます。それでは、次の議題に移らせていただきます。議題は2点ございます。まず1点目は、第2期八戸市美術館中期運営計画（案）についてです。それでは、事務局よりご説明をお願いいたします。

○館長：

それでは説明させていただきます。本日は、協議会の中でも最も重要な議題の一つである、第2期八戸市美術館中期運営計画（案）について、ご説明いたします。資料3をご覧ください。2ページをご覧くださいと、計画策定の趣旨が記載されています。ここでは、八戸市のさまざまな計画や、国際的な動向として国際博物館会議（ICOM）による定義の変更などを踏まえ、これからの八戸市美術館をどのように位置づけていくかについてまとめています。次にビジョンですが、これまでと変わらず「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館 ～出会い

と学びのアートファーム～」を継続して活動を行っていきます。続いて、計画期間についてです。前回もお話したとおり、令和7年度から令和11年度までの5年間を計画期間として設定しております。計画推進のイメージをご覧くださいとわかるように、第1期で得た成果を踏まえ、第2期の5年間をこの計画に基づいて推進していく考えです。次に、4ページをご覧ください。ここでは、第1期中期運営計画期間の主な成果と課題をまとめています。これは、先ほどの報告書とも関連する内容です。1番目が、「魅力的な展覧会プロジェクトの実施」ですが、成果としては、多様なアプローチによる新たな視点の展覧会や、アートの楽しさを体感できるプロジェクトに取り組んだ結果、観覧者から高い満足度を得ることができました。一方で、課題としては、まだ来館したことのない市民も多くいるため、今後は多様なジャンルの展覧会の開催に加え、アート以外の分野との連携を深めるとともに、ジャイアントルームの機能を活かした事業を展開することで、作品鑑賞の幅を広げ、観覧者の満足度をさらに向上させるとともに、美術に関心のない層へのアプローチを強化していく必要があると考えております。2番目が、「プロジェクトの常設展示・コレクション化の取組」ということで、成果としては、「もの」や「こと」を生み出す新しいかたちの美術館として、当館ならではのユニークなプロジェクトを構想・実施し、着実に実績を積み重ねてきました。課題としては、一過性のプロジェクトに対する市民の理解を深めるため、人の活動が見えにくいプロジェクトで制作された「もの」や「こと」を、写真や映像などを通して再演・再現するアーカイブの整備や、アーティストが関与して生み出した作品のコレクション化に取り組む必要があると考えております。先ほどの報告の中では細かく触れませんでしたでしたが、教育版画展の中でも、井川丹さんの音楽作品を再展示しましたが、そのような取組も重点的に行いたいと思います。3番目としては、「学校連携事業のさらなる推進」ということで、成果としては、「学校連携プロジェクトチーム」の発足により、学校教員と美術館スタッフのつながりが確立し、授業における美術館の活用が進んだほか、鑑賞プログラムの研修会を実施する学校が登場し始めました。課題としては、学校連携ラボの利活用の促進を進めながら、児童・生徒が美術館を訪れ、作品や活動に触れる機会を増やすためのアプローチを積極的に進めていく必要があると考えております。4番目としては、「大学・高専連携事業のさらなる推進」ということで、成果としては、美術館の専門性と大学・高専が持つ専門性を活かした多様なワークショップにおいて、参加者が創作活動を通して創造力が養われるなど、アートの価値観や多様性の理解につながったほか、託児サービスの実施により、子育て世代が気軽に来館できる機会を提供するとともに、学生にとって実践的な学びの場を創造し、当館のアクセシビリティの向上にもつながりました。課題としては、大学や高専の専門性と美術館のアートの専門性を融合させたアートの学びを通して、人材育成や地域経済の活性化につなげるほか、子育て世代を含む多様な来館者のアクセシビリティ向上に向けた事業の充実を図る必要があると考えております。5番目としては、「アートファーマーや共創パートナーを中心とした、市民による多様な芸術文化

活動創出に向けた仕組みの構築」ということで、成果としては、アートファーマープロジェクトでは、活動環境の整備やアーティストとの創作活動などを進めたことで、多様な参加者が集まり、世代を超えたつながりが生まれるとともに、当館を活用した自己表現の場が広がりつつあります。また、共創パートナーと連携した共創企画の実施は、アートのまちづくりの推進につながりました。課題としては、参加するアートファーマーの固定化や自主的な活動への発展が十分でない、共創企画を行う共創パートナーが限られているといった課題も見られました。今後は、より多様な人々や団体の参加を促進するほか、アートファーマーが自ら企画・発信できる仕組みの整備や、新たな共創パートナーとの連携を図る必要があると考えております。6 番目としては、「戦略的な広報」ということで、成果としては、市広報誌や新聞、チラシ・ポスターの配布、HP や SNS の活用などを通して積極的に当館の活動を発信した結果、ウェブアクセス数や SNS フォロワー数が増え、当館の認知度向上が図られました。課題としては、展覧会やプロジェクトの開催周知、アートファーマーや共創パートナーの募集などにあたっては周知不足の面があったことから、今後は、広報手段、ターゲット、時期、内容など、広報計画を立て、効率的かつ効果的な情報発信に取り組む必要があると考えております。これらをもとに前回の評価の中でロジックモデルというものを活用した評価を行ってきました。次期中期運営計画においても、ロジックモデルを採用することを考えております。事業の目的や成果との因果関係を明確にし、目標達成のプロセスを可視化するロジックモデルを活用したセオリー評価、アウトプット評価、アウトカム評価を実施することを考えています。その下にロジックモデルの案が示されておりまして、7 ページにアウトプット評価とアウトカム評価というのがいくつか並べられております。8 ページのところに、そのアウトカムに関する評価指標としてまとめていますが、ロジックモデル案で設定した直接アウトカム、中間アウトカム、社会的インパクトについて、定量的・定性的データを組み合わせる評価を行います。定量的データは、美術館が保有する数値データや、度数・頻度などを測定できるアンケート調査結果を活用します。定性的データは、アンケートの自由記述、来館者や参加者の感想・意見・エピソード、個別・グループインタビュー、観察記録や来館者などからの意見・要望の記録を収集するとともに、必要に応じて写真や動画を活用し、多角的に分析します。9 ページの事業評価体制についてですが、年度評価の流れとして、10 月の第 1 回運営協議会を開催して、評価に対する意見、事業に関するフリートークをしていただき、3、4 月に第 2 回運営協議会を開催して前年度事業報告と翌年度事業計画を審議できればと考えております。中期評価としては 5 ヶ年計画でありますので、計画期間の最終年度の令和 11 年度には、7、8 月に運営協議会を開催して、評価に対する意見をもらい、3 月に次期中期運営計画を承認していただく流れを想定しております。続いて 10 ページになります。次期中期運営計画の今期の目標およびミッションになりますが、基本的には先ほども説明してきましたように、さまざまな事業を行ってきまして、ある一定の評価ができていると考えておりますので、その流れを継承

しつつ改めて、今期の目標として3つを挙げております。その目標の1番目が「地域文化が次世代へ継承発展する」ということ、2番目が「クリエイティブな人が増える」ということ、3番目が「地域の社会的包摂を推進する」ということ、3つを目標として掲げております。今期の3つを目標と掲げた上での達成すべきミッションとしては、4つの項目を挙げております。まず1つが、「地域の文化芸術を受け継ぎ、新たな文化芸術活動が生まれる環境をつくる」ということで、郷土ゆかりの作品の収蔵や地域資源を活かした展覧会やプロジェクトの開催を通して、郷土独自の文化芸術に触れる機会を創出し、地域への愛着や誇りを育み、次世代へ継承する場をつくります。さらに、地元アーティストに焦点を当てた展覧会の開催や地域の文化芸術活動の支援などを通して、地域に根差した文化芸術が育まれる環境をつくります。2番目が、「人々がアートに触れ、創造力を育める環境をつくる」ということで、誰もが創造性を発揮し、自由に表現できる社会を実現するため、展覧会やプロジェクト、教育機関との連携による事業などを通して、子どもから高齢者まで幅広い世代がアートに触れ、学び、創造力を育める環境を提供します。さらに、クリエイティブな人やアートに関わる人を増やし、社会全体の文化的な豊かさを育んでいきます。3番目が、「多様な人々が交流し、新たな創造が生まれる場をつくる」ということで、アートを見る人、創作活動を楽しむ人、美術館の事業に関わるアートファーマーや共創パートナー、アーティストなど、多様な人々が交流することで、お互いの考え方や価値観を認め合い、新たな発見や創造が生まれる場をつくります。市民や団体、教育機関、企業との共創企画の実施や、誰もが参加しやすい環境を整えることで、地域コミュニティの活性化や人々が主体的にアート活動に関われる土壌を築きます。4番目が、「「八戸ならではの」の特色を活かした地域活性化の仕組みをつくる」ということで、「アートのまちづくり」の中核施設として、郷土の歴史や風土に根ざした文化資源を掘り起こし、「八戸ならではの」の魅力を国内外に発信します。さらに、観光、教育、まちづくり、福祉や国際交流など多様な分野と連携し、政策間の相乗効果を高めることで、地域課題の解決や地域社会の発展に貢献する仕組みをつくる、ということを考えております。11ページ以降には、取組内容と取組方針について記載しています。ここでは、展覧会やプロジェクト、調査研究などを、年度ごとにどのくらいの回数・どのような方法で実施していくかをまとめています。続く15・16ページでは、施設の管理運営について、そして17・18ページには、SDGsへの取り組みについて記載しています。ここで一度、6ページのロジックモデル案に戻っていただければと思います。このロジックモデルでは、インプットがあり、それをもとにした活動がアウトプットとして事業に反映され、そのプロセスの中で直接アウトカム、中間アウトカムを経て、最終的には社会的インパクト、つまり「地域文化が次世代へ継承・発展する」、「クリエイティブな人が増える」、「地域の社会的包摂が推進される」といった目標につながっていくような流れを描いています。このような構造は、今回中期運営計画を立てるにあたって、評価の視点も取り入れながら整理したものになっています。そこで、この中期運営計画の内容について

て、皆さまからさまざまなご意見をいただければと思っております。以上です。

◆会長：

令和6年度の事業実施状況のご報告と併せて、第2期中期運営計画（案）についてご説明をいただきました。美術館をはじめとする芸術文化施設においては、単に入場者数のみで評価するのではなく、どのような基準で事業の成果を測るかが重要となっており、それぞれの施設で評価基準を構築していく必要があります。その点で、八戸市美術館の中期運営計画に盛り込まれているロジックモデルは、非常に先進的な取り組みであると思います。ここで委員の皆さまからもご意見をいただければと思います。

◆委員：

八戸市美術館の準備段階からずっと見てきて、だんだん地元に馴染んできたなという感じがしています。今年は青森県5館連携ということで、5つの美術館が連携してアートフェスを開催しましたが、その中でも八戸の取り組みは他とは少し違って、中心街にある立地を積極的に活用し、イベントを開催したり、近所の飲食店との連携が生まれたりして、街全体の中に美術館がしっかり根付いてきたなと感じています。また、この時期は県外からの観光客もかなり来ていたのではないのでしょうか。開館当初は、市民を中心に考えていて、観光面にはあまり力を入れていない印象でしたが、最近では観光客も増え、八戸は青森県の玄関口という立地の良さもあり、美術館の存在感がより際立ってきたように思います。今回の5館連携の取り組みを通じて、八戸市美術館の魅力や役割がしっかりと伝わったのではないかと感じています。こうした積み重ねが、美術館をさらに良いものに育てていっているのだと思います。ただ、そうした中で貸館の利用も非常に多くなっていますが、美術館としての本来の役割、コレクションラボなどの企画や、八戸の歴史・文化を芸術として次の世代につないでいく役割については、もう少し積極的に打ち出せる余地があるのではないかと思います。今回の版画展はとても良かったと思いますが、もっと多様な展覧会や企画を広い視点で展開していくことも、これまでの成果をさらに発展させるためには重要だと感じています。そういう意味では、今後の計画を立てる上でも、評価を行う上でも、これまで最も良かった点や、さらに力を入れていきたい部分が明確になってくると思いますので、そうした点を少しずつ次に活かしていただければと思います。また、教育版画展については、以前伺った際には観覧者はそれほど多くないと聞いておりましたが、結果的に7,000人近くの観覧者があり、地方の美術館の自主企画展としては非常に良い成果だと思います。青森県立美術館でも5,000、6,000人規模の展覧会があったりしますので、評価できると思います。こうした取り組みを地道に続けていただければと思います。

◆委員：

職員の皆さん、ご苦勞様でした。中期評価が概ね達成されたということで、本当によく頑張りました。来年の事業についても、ここに記載されている内容に沿って、引き続き取り組んでいただければと思います。私から一つ、小さな提案をさせていただきます。今回、5館連携の中で、私もアーティストとして作品を展示させていただきました。その際、子どもたちに塗り絵をさせたんですが、子どもたちがとても喜んでくれました。塗り絵を持ってきたのは私が花丸を付けて「大変

よくできました！」と声をかけると、飛び上がって喜んでくれました。実際には2ヶ月ほどの取り組みでしたが、大変評判が良かったんですね。こういう活動は、ぜひ今後も継続していった方が良いのかなと感じています。子どもたちに絵を描く楽しみを味わってもらうことは、私たちの大切な役割の一つだと思っています。もし、美術館の方でそういった企画があれば、ぜひ協力させていただきたいと考えています。特に、子どもたちが集まりやすい夏休みの時期が良いのではないのでしょうか。私のアイデアとしては、「ゴッホを描こう」というテーマで、ゴッホの模写絵を用意して、子どもたちにクレヨンで自由に描いてもらうというものです。そして、仕上がった作品に「よくできました！」と声をかけてあげることで、さらに喜びを感じてもらえるのではないかと思います。対象は、幼稚園児から小学生くらいがちょうどいいでしょうね。私も一市民として、できることがあればぜひ協力したいと思っていますので、何か企画がありましたら、どうぞよろしくお願いします。今年も大成功させましょう。

◆委員：今年度も数多くの企画展やプロジェクト、イベントなどを本当に精力的に取り組んでこられたと思います。その成果を拝見して、改めて皆さんお疲れ様でしたと感じています。ここに来て八戸市美術館の空間そのものを感じて楽しむことに加えて、さまざまなイベントを通じて、体験する楽しみがあるということも、多くの方に知らせていくことが大切だなと思いました。「体験の楽しさ」をもっともっと広く発信していくことが大切だなと思っています。そうすることで、来館者の皆さんが自分なりに新しい価値を見つけたり、「次はこんなことをやってみたい」という気持ちを持ってくれるようになるのではないのでしょうか。実際、アンケートの中にも、アートファーマーを体験したことで自分自身の気づきや発見があったという声が多く寄せられていましたので、その点をさらに広げていく必要があると感じました。また、アウトカムに対する定性的なデータ分析については、もう少し深掘りができると良いのではないかと思います。例えば、企画展やイベントに参加された一般の方々の声だけでなく、アーティストの方々にもインタビューしてみると、より多角的な成果や気づきが見えてくるのではないのでしょうか。可能であれば、ぜひそうした取り組みも検討していただければと思います。

◆委員：八戸市美術館は、「こんな美術館があったらいいな」と以前から思い描いていた理想に非常に近い美術館と感じ、大変感動いたしました。自分の住む街と比べると、正直なところ羨ましくなるほどで、本当に素晴らしい取り組みだと思っています。本日は、2点お伺いしたいことがございます。1点目は、一般貸館利用の中で、市民連携推進課が共催された「シン・クレイジーバスツアー」の際に設置されていたドーム状の構造物について、これは学芸員からのアドバイスに基づいて設置されたものなののでしょうか。2点目は、アートファーマー事業の中で、障害者施設の子どもたちがガイドとして参加されたというエピソードについて、より具体的な内容を教えていただければと思います。

○事務局：まず一つ目のご質問についてご回答いたします。「シン・クレイジーバスツアー」につきましては、市民連携推進課が実施する女性チャレンジ講座に参加された女

性チームの皆さまが企画したものです。今回の企画には学芸員は関与しておりません。企画にあたっては、参加者の皆さまがインターネットなどで調査を行い、ビニール製のドーム状の空間で、さまざまな色を使い、汚れても差し支えない服装でTシャツに色をつけながらアートを楽しむ、というユニークな体験があることを知り、楽しそうだと感じて、その講師の方に直接ご連絡を取り、開催に至ったものです。

○館長： 二つ目のご質問についてですが、障害者施設の子どもたちがガイドに参加した件につきましては、おそらく建築ツアーガイドのことを指しているのではないかと思います。展覧会では手話通訳を活用して、障がいのある方々に配慮した取り組みも行っておりますが、今回ご指摘の内容については、建築ツアーガイドの活動に参加されたものと思われます。

◆委員： わかりました。今回の企画は、市民連携推進課が主催する女性向けの企画で、私はその結果発表会で講師としてお招きいただきました。1年間を通して、こういう企画をやってみたいと考える女性たちが、その想いや問題意識をもとにさまざまな提案を発表する場で、参加者の多くは、介護の問題や夫婦間の会話不足、本へのアクセスがづらい社会状況など、日常生活の中で直面している課題を女性の視点でとらえ、それを解決しようとする企画を立てています。その際、多くの参加者がぜひ美術館を使ってやりたいと希望しているのがとても印象的でした。たとえば、介護の大変さを多くの人に体感してもらうような企画でも、美術館で開催したいという声がありました。もちろん、「はっち」など他の施設でも開催可能なのですが、なぜか美術館を使いたいとおっしゃっています。今回の「シン・クレイジーバスツアー」の参加者たちも、また企画を実施したいと喜々として希望していました。最初はストレス発散のために段ボールを壊すような体験をしたいというところからスタートしたようですが、結果的にとても創造的でアーティスティックな内容に仕上がっていたため、誰かが良いアドバイスをしたのかなと思っていました。たとえば、俊文書道会のように、ここを借りてくださる市民の力というのは、仙台では考えられないほど大きいと思っています。俊文書道会の西里先生が動画をいつも送ってくださるので、仙台の書道の先生に見せると非常に驚かれ、こういうことを仙台でもやってみたいとおっしゃるのですが、スペースなどの問題で実現は難しいようです。ジャイアントルームという大きなスケールの空間に対して、どういう展示がふさわしいかといったセンスを、一般市民の方々が持っていることに驚かされます。たとえば、「シン・クレイジーバスツアー」の女性たちも、最初は何かを壊すという発想から始まりましたが、何か響き合うものがあって、アートとは無縁と思われていた彼女たちが、あれだけの創造的な表現を生み出したというのは、本当に人が育っていることを実感しました。現実には、美術館スタッフは多忙であるため、一般貸館の利用者と日常的に接点を持つことが難しいと思いますが、共創パートナーとしてあらかじめ設定した相手に限って取り組むという枠の中だけで考えてしまうと、せっかくの大きなチャンス逃してしまうのではないかと思います。八戸市民は、一つのテーマについ

て深く考え、しっかり議論できる力をお持ちの方が多く、と思っています。だからこそ、美術館を利用してくださる方々が生み出す試みを、もっと広い意味で共創パートナーと捉えていくことで、さらに相互作用が働いて、今後美術館がやろうとしていることが加速度的に進む可能性があると思います。学芸員の方々にももう少し余裕があって、貸館を利用する市民と交流することができれば、スタッフが少し関わってくれたおかげで、企画がより良くなったとか、新しい発見があったとかいうことにつながる可能性があり、そういった成果につなげていければと思います。貸館利用者と美術館スタッフの関わりが少ないと、市民の持つポテンシャルが、現在の評価制度には反映されにくいと思います。実際には市民の方々が、自分たちの手で企画を洗練させ、実現していることが、評価の中にきちんと反映されるようになれば、この美術館の価値そのものが、より高く認められることにつながると思います。もちろん簡単なことではありませんが、相互作用の発生のさせかたなど工夫していくと、より良いと思います。

○事務局：アートファーマーのアンケートに記載されていた、障害者施設の子どもたちがガイドに参加してくれたことが最も印象に残っている、というご意見についてですが、これは建築ツアーガイドに関するエピソードです。このときは、地元の放課後等デイサービスを利用している子どもたちが見学に訪れてくださいました。ガイドの皆さんも、どうしたら皆さんに楽しんでもいただけるかと工夫を凝らし、普段は使用しないワークシートを用意するなどの準備を行いました。ガイドの中には、普段展示室で案内員として働いている方もおり、訪問される方の特性に応じてどう配慮すればよいか、事前には少し心配する声もありました。特に、感情の起伏が激しくなる傾向のあるお子さんもいらっしゃることから、どう対応すべきかといった不安もありました。しかし、実際にお会いしてみなければわからないし、まずは来てくださった方々に豊かな体験をしていただけるよう、ガイド一同で前向きに話し合い、ご案内に臨みました。当日は、子どもたちが積極的に質問してくださったり、パネルを用いたお部屋の説明の際にも豊かな想像力を働かせてくださったりと、事前の不安をよそに、柔軟に楽しんでもいただいていたのが印象的でした。結果として、ガイドの皆さんも、心配は杞憂だったねと振り返り、お互いにとってとても良い体験になったと感じています。

◆委員：ありがとうございます。これまでの積み重ねがあるからこそ、女性たちが美術館を使いたいと思うのだと思います。美術館に来ることで、何かワクワクすることが起きるかもしれないとか、安心して自分を表現できる場所だというイメージを、すでに現実のものとして共有しているからこそ、美術館を使いたいという希望が生まれるのではないのでしょうか。そうした感覚を持ってくださる女性たちやお母さんたちに支持される施設は、今後さらに発展する可能性を持っていると思います。

ですので、ぜひそのような市民との関係性を大切にしながら、取り組みを今後も推進していただけたらと思います。

◆委員：高校の教員という立場から、学校連携について少し感想を述べさせていただきます

す。まず、今年度は学校連携の一環として、教員が講師となり、対話型鑑賞のワークショップを実施いたしました。教員にとっても非常に良い経験になったのではないかと考えております。また、私が担当しております美術館新聞部では、本日、委員の皆さまの机にできたての美術館新聞をお配りさせていただきました。今年度で活動4年目、第4号の発行となります。小学生と高校生が連携して制作した新聞で、特集記事では教育版画の展覧会を取り上げております。表面の右側には、テレビ番組の企画を模した「Youは何しに美術館へ」というコーナーを設けており、美術館にどんなきっかけで来たのかをインタビューしてみようという趣旨で行いました。インタビュアーは小学生が担当し、高校生はそのサポートに回るという形で進めました。裏面では、八戸にある画材屋さんにインタビューを行いました。実際に絵を描く人というよりは、美術を支えてくださっている方々にインタビューをしてみようということで、この企画もすべて小学生と高校生が考えたものです。「Youは何しに美術館へ」の中では、友人や家族、恋人、または勉強のために来たというように、来館のきっかけはさまざまで、皆さんそれぞれの動機を持って美術館を訪れていることがよくわかりました。この新聞については、お時間のあるときに、ぜひゆっくりとご覧いただければと思います。また、本校の書道の先生とも、美術館を活用してみたいという話をしておりまして、「授業の中だけで実際に出向くのはなかなか難しいかもしれないけれど、いつか行ってみたいね」との声もありました。もし、高校生向けの出張授業などをご検討いただければ幸いです。ぜひお願いできればと考えております。お互いに行き来をしながら、つながりが深まっていくといいなと感じております。書道の先生からは、「彩る書」というコレクションラボの展覧会について、「とても面白かった」との感想もいただきました。特に、鑑賞のヒントになるワークシートがとてもわかりやすく、楽しく鑑賞できたという声がありました。アート初心者の方でも楽しめるような、そんなヒントとなる工夫を、これからもどんどん取り入れていただけたらと思います。次年度の目標として、「学校連携ラボの利活用の充実」が掲げられていますが、学校連携が始まった当初から、教員同士が交流できる場としても重要であると感じており、私自身もラボを利用する者の一人として、今後さらに頑張らなければならないと考えております。というのも、若い美術や書道の先生方が、現場で非常に苦勞されている現状があります。大学を卒業しても、学校では美術や書道の教員が一人だけということも多く、相談相手もいない中で、仕事を続けることが大変だという声をよく耳にします。そういった声にもっと耳を傾けなければならないというのが、私自身の反省点でもあります。ですので、次年度は、先生方が気軽に集まり、子どもたちと一緒に美術館に足を運べるような、学校連携が先生方や子どもたちにとっての拠点となるよう、工夫を重ねていきたいと考えております。学校連携事業につきまして、次年度もどうぞ引き続き、よろしくお願いいたします。

◆委員： 早いもので、もう4年間が経過したんだなということを、今日お話を伺いながら改めて実感しておりました。池田委員や吉川委員から、市外の方々の視点で、八

戸市美術館の活動を高く評価していただいているということに触れられていましたが、それは私たち市民にとっても、まさに同じ想いだと感じています。そういった意味で、美術館というのはどうしてもよそ行きのような印象を持たれがちですが、八戸市美術館は「普段着の美術館」になろうとしているのではないかと思います。これから第2期に入っていくわけですが、第1期のときには、理想的な美術館が始まるんだなという印象を強く持っておりました。今回のミッションを拝見して、今後はより野心的なチームに入っていくのではないかなという印象を受けました。その中で、やはりこの美術館の当初から掲げているビジョン「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館」というキャッチフレーズは、第1期、第2期を通して共通して大切にしていきたいものだと改めて感じました。よく見てみますと、種を蒔くはプランティング、人を育むはディベロップング、創造するはクリエイトと、アートファームということで、実はこの美術館には当初からPDCAサイクルがしっかりと構築されていたのだな、ということに気づかされました。これからも、この八戸市美術館において、PDCAサイクルをしっかりと回しながら、アートファームを毎年豊かに育てていって欲しいと思っています。

◆会長：

ありがとうございました。委員の皆さんからは、概ね高い評価をいただけたかと思います。僕自身、この美術館の準備室の段階から関わらせていただいていた、先ほど吉川委員からのお話にもありましたが、こんな美術館ができればいいよねといった理想を掲げながら企画していたことが、今日の報告を聞く限り、かなり実現できているなという印象を受けました。もちろん、これだけのことをやるのは大変だよねと話していた時期もありましたが、実際こうして形になってきているのを見ると、本当にすごいなと思います。特にこの美術館の大きな特徴でもあるジャイアントルームは、市民にとっての敷居の低さを感じさせる場にもなっていて、可能性を広げてくれる空間だと思います。いろんな市民団体の方々がここで何かできるかもとイメージを膨らませられるような、そんな力を持っている。それは建築としての力もありますし、それをしっかり運用してきた美術館スタッフやアートファーマーたちの取り組みの成果でもあると思います。第1期で掲げていた計画の多くは、かなり実現できていると感じていますし、今後の第2期では、これまでに見えてきた課題にもしっかりと向き合いながら、さらに深めていけるのではないのでしょうか。またこの美術館には、そうした取り組みを市民や全国に向けて発信していける力もあると思っていますので、今後もさまざまなチャレンジを続けていただきたいと願っています。それでは、次の議題に移りたいと思います。続いて、議題②「令和7年度事業計画（案）」について、事務局からのご説明をお願いします。

○館長：

それでは、令和7年度の事業計画（案）について、資料4-1から順番にご説明していきたいと思います。まず資料4-1ですが、こちらは事業計画の概要になります。先ほどから話に出ております中期報告書の中で挙げられていた課題を踏まえ、その裏側に掲載されているのが、第2期の中期運営計画（案）におけるミッショ

ンです。このミッションを軸にしながら、令和7年度の事業内容をどう組み立てていくか、という視点で検討を進めてきたという流れになります。それでは、続きの説明は副館長からお願いいたします。

○事務局： それでは、資料4-2 八戸市美術館運営事業についてご説明いたします。引き続き、出会いと学びのアートファームをコンセプトとする新しいかたちの美術館として、新たな文化の創造および八戸市全体の活性化を図ることを目指して運営を進めてまいります。次に、令和7年度の主な事業内容についてご報告いたします。予算額も併せて記載しておりますが、主な項目として、まず美術館の企画運営には5,715万7,000円の予算を措置いただいております。施設の維持管理費としては1億7,340万円、美術館の管理運営費としては4,784万円を計上いただきました。特に企画運営に関しては、当初の要求通りの予算をほぼ確保できた形となっており、厳しい財政状況の中でも、八戸市が文化政策にしっかりと取り組んでいることの現れであると受け止めております。なお、詳細につきましては、後ほど担当者より説明させていただきます。以上です。

○事務局： 続きまして来年度の展覧会の事業について、松倉からご説明いたします。資料は4-4になります。事業概要でございますが令和7年度の展覧会については現在、大河ドラマで盛り上がりを見せております浮世絵の展覧会初め、世界的なコンテンツであるポケットモンスターをテーマにした工芸作品の巡回展、また特別貸館により高い人気を誇る巡回展を開催いたします。展覧会は2(1)、春に企画展「浮世絵コンニチは タイカンする江戸文化」、夏に巡回展「ポケモン×工芸展 ―美とわざの大発見―」、裏面まいります、特別貸館で「古代エジプト美術館展」、こちらは担当学芸員がおりますので後ほど担当者から意気込みをお話いたします。特別貸館のGOMA 展に関しては、青森県在住の画家 GOMA さんの個展を開催いたします。これまで県内2ヶ所で開催されてはいますが、県内多くの方が来場されている人気の展覧会でございます。こちらは特別貸館ということで GOMA さん側で企画運営などいたしますので、内容につきましては詳細がわかりましたら、皆さまでご報告したいと思います。八戸市美術展ですが、例年どおり9月頃の開催を予定しております。八戸市文化協会との共催によりジャイアントルームを含む全館を使って開催いたします。最後のコレクションラボですが、現在開催中の西野こよ展、「きっと、そこには」、「渡辺貞一展(仮)」、こちらも学芸員の方からどのような内容になるかというところをご説明したいと思います。では浮世絵展担当の平井から説明いたします。

○事務局： 浮世絵展を担当しております、学芸員の平井です。今回の展覧会は、近隣の八戸クリニック街かどミュージアムの小倉館長と共同で企画を進めてきたもので、最初の構想段階から企画と一緒に考えてつくり上げた展覧会になります。展示される作品の多くは、街かどミュージアムが所蔵する選りすぐりの作品をお借りするほか、県外の浮世絵専門のミュージアムからも作品を借用して展示いたします。構成は全4章からなっていて、たとえば第1章だけ見ても、第3章だけ見ても、それぞれ単体で楽しめるようになっています。浮世絵に初めて触れる方から、あ

る程度知識のある方まで、それぞれに新しい発見があるような内容を目指しています。テーマとしては、基本的な素材や技法の紹介から、モチーフを深掘りしていくような内容まで、さまざまな角度から浮世絵の魅力にアプローチする展覧会です。また、展覧会の企画だけにとどまらず、関連イベントとして、たとえば八戸高等支援学校の生徒さんたちと連携し、和紙づくりの体験ワークショップを開催する予定です。市内のさまざまな団体や施設との共創企画を行うこともテーマの一つとなっております。以上です。

○事務局： 続きまして、巡回展「ポケモン×工芸展 美とわざの大発見」についてご紹介いたします。この展覧会は、2023年に国立工芸館で初開催されたもので、一度アメリカで展示した後、昨年からは日本国内でも各地を巡回しており、非常に人気の高い展覧会です。これまでの巡回先では、いずれも10万人を超える来場者を記録しており、当館でも多くのお客様にご来場いただけることを見込んでおります。どれほどの人数になるかはまだ予測が難しい部分もありますが、さまざまなケースに対応できるよう、現在しっかりと準備を進めております。また、展覧会に加えて、出展作家によるトークイベントなどの関連企画も検討中です。詳細が決まり次第、改めてお知らせいたしますので、ぜひ楽しみにお待ちしております。

○事務局： それでは次に、特別貸館「古代エジプト美術館展」についてご説明いたします。こちらは巡回展で、主催はデリー東北新聞社様、八戸市美術館は共催という立場での開催となります。展示内容としては、古代エジプト専門の美術館「古代エジプト美術館 渋谷」のコレクションを紹介するもので、ミイラやミイラマスク、木棺、レリーフなど、約200点の貴重な資料が展示される予定です。古代エジプトの神々への信仰や、当時の人々の衣食住についても知ることができる展示内容となっています。現在まだ調整中ではありますが、会期中には記念講演やワークショップなどの関連イベントも開催を予定しています。県内でエジプト文明に関する展覧会が開催されるのは久しぶりになりますので、多くの来場者が見込まれるのではないかと期待しています。また、学校の見学などにも活用していただければと考えております。

○事務局： 続いてコレクションラボについてご紹介いたします。すでに開催中の「西野こよ表現への挑戦」ですが、令和6年度の新規収蔵作品として、南部菱刺しの技法を用いた美術作品を展示しております。一見すると織物のようにも見えるこれらの作品は、青森県南部地方に伝わる伝統技法の菱刺しを現代的な感性で表現したものです。作家の手により、繊細に刺し込まれた模様が立体的に浮かび上がり、特に正面からご覧いただくと、金糸の輝きが水面のきらめきを思わせるような美しい演出がなされています。まだご覧になっていない方は、ぜひお帰りの前に足をお運びいただければ幸いです。

○事務局： 続いて、コレクション011「きっとそこには」についてご紹介いたします。この展示では、「きっとそこには何かがあったかもしれない」「あるかもしれない」「もしかしたら何もないかもしれない」といった、目には見えないものや絵に描かれて

いない背景、例えば、額縁の外に広がる風景や時代背景、絵のモデルとなった人物や風景だったり、作者自身について、来場者と一緒に想像し、考える展覧会にしたいと考えています。展示作品としては、風景画や人物画を中心にご紹介する予定です。昨年夏に開催した「コレクションラボ 008 彩る書」では、宮本委員からもご紹介いただきましたように、ワークシートを作成して作品理解を深めていただいたほか、複製作品を実際に筆でなぞって体験できるコーナーなど、来場者がより深く作品に触れられる工夫を行いました。今回も、引き続きワークシートの充実を図りたいと考えています。前回は大人から子どもまで共通で使える1種類のワークシートのみの用意でしたが、もっと多くの方に手に取っていただけるよう、年齢や発達段階に応じた内容が必要だと感じております。そこで今回は、学校連携プロジェクトチームの先生方のご協力も得て、小・中学生向け、高校生向けなど、対象年齢に合わせた複数のワークシートを作成していきたいと考えています。

以上となります。

○事務局： 次に、「コレクション 012 渡辺貞一展（仮）」についてご紹介いたします。渡辺貞一は青森市出身の画家で、八戸市内の作家たちとも親しい交流を持っていた人物です。当館では現在、彼の作品を80点弱所蔵しております。渡辺貞一の作品の特徴は、抽象的でありながら宗教的ともいえる精神世界を描いている点にあります。今回の展覧会では、あらためて渡辺貞一の足跡をたどるフィールドワークを行い、交流のあった方へのインタビューや関係各所へのリサーチを通じて、より深く彼の人物像や創作背景に迫る展示構成を目指しております。以上です。

○事務局： では、引き続き資料4-4、現在の展覧会以外の各事業についてご説明いたします。学校連携による各種事業やアートファーマープロジェクト、アクセシビリティ向上を目的としたプログラム、そして共創パートナーに関連する事業を継続して実施してまいります。それぞれの事業についてですが、企画グループが担当する、2(1)学校連携事業と、3ページの4手話通訳付き展覧会ガイドツアーについて、私からご説明いたします。それ以外の事業については、総務グループの田中リーダーよりご説明いたします。まず1ページ2(1)学校連携事業についてですが、学校連携プロジェクトは今後も継続していきますが、先ほど宮本委員からお話がありましたとおり、学校連携ラボを拠点とした活動をさらに強化してまいります。宮本委員にも引き続きご協力をお願いできればと考えております。また、今年度の事業報告でもご説明しました「はみ出す力展」については、来年度も引き続き開催する予定です。三澤委員からもご提案をいただいております。今回は少し趣向を変えた形で開催し、美術教育に携わる全国の先生方にもご来館いただければと考えております。次に手話通訳付き展覧会ガイドツアーについて、美術館のアクセシビリティを高める取り組みとして、引き続き実施してまいります。展覧会ごとに手話通訳者を招き、手話のサポート付きによる対話型鑑賞のガイドツアーを行います。手話通訳を導入することで、手話を母語とする方のアート理解を促進し、感想や質問の発言を通じて、より多くの方に参画の機会を提供いたします。

さらに、八戸聾学校や青森県ろうあ協会との連携や情報交換を通じて、障がいのある方も安心して過ごせる美術館づくりを進めてまいります。以上です。

○事務局：総務経営グループが担当している事業についてご説明いたします。まず、大学・高専連携事業についてですが、今年度も引き続き、大学の資産を活用したアートの学びに関する事業を実施いたします。市内の大学や高等専門学校が有する専門性や技術とアートの専門性を融合させ、新たな学習や活動の創出を通じて、人材育成や地域経済の活性化につなげていきたいと考えております。令和7年度の活動といたしましては、①高等教育機関のアートセミナー事業、②アートマネジメント事業、③アート×幼児教育事業の3つを行ってまいります。続いて、アートファーマープロジェクトについてです。①市美術館建築ツアーガイドは継続事業として、今年度も毎月最終土曜日に開催を予定しています。また、館外研修や建築紹介パンフレットの制作、新たなガイド募集とそれに伴う講座の開催も行います。②美術館広報部は令和6年度から始まった事業で、美術館での体験をもとに、アートファーマー独自の視点や発想で情報発信を行うものです。令和7年度も広報活動を継続し、新規メンバーの募集および研修を実施する予定です。活動内容としては、PR動画やWeb記事、美術館ラジオの制作に加え、近隣のコミュニティラジオ BeFM と連携し、アートファーマーがラジオ出演することも計画しています。③美術館ものづくり部（仮）は、令和7年度から新たに開始する事業です。いつでも美術館で創作活動を楽しめる場を目指し、八戸にゆかりのある作家とアートファーマーが協力して創作キットを開発していく予定です。展示会期間や冬休み期間にはスペースを拡大し、アーティストやアートファーマーが常駐する工作室（仮）を設け、来館者とともにものづくりを楽しむ機会を提供します。先ほど漆畑委員からもお話がありましたが、地元アーティストとの交流の場としての役割も期待しています。④アートファーマーミーティングについては、アートファーマーやアーティスト、ゲストとともに、これまでの活動の振り返りと今後について考える機会として、来年3月頃の開催を予定しています。最後に、共創パートナーについてですが、こちらは令和6年度から継続して実施している、「共に創る！アートのまちづくり魅力発信事業」です。八戸歴史文化発信事業実行委員会と連携し、美術館の共創パートナーを募り、それぞれの文化芸術イベント情報の紹介や相互連携を図る取り組みを行っています。昨年7月から開始したLINE公式アカウント「ヨッテミッテ」によるイベント情報発信、「はちのへヒストリア」とのホームページ連携も継続して実施いたします。また、本日お配りしている、まちなかアートマップの作成・配布や、パートナーミーティングの開催も予定しております。以上で資料の説明を終わります。

◆会長：ありがとうございました。令和7年度の計画案となりますが、皆さまからのご意見を改めて伺う前に、私からもいくつかコメントをさせていただきます。まず、大学・高専連携事業について、特に大学資産を活用したアートの学び事業についてですが、これは非常に大きな可能性を秘めていると感じています。地元の大学との連携という意味でも大変重要です。また評価のロジックモデルを構築して

いく過程で、さまざまなデータ分析が必要になる場面においては、専門性の高い大学の研究者との連携も有効だと考えています。私自身を含めて、委員の皆さんの中にも、どのように評価をしていくかという研究を行っている方がいらっしゃいます。藝大の事例ではありますが、芸術系大学単独では難しい場面もあり、横浜市大や京大といった、データ分析に長けた大学と連携するケースも実際にあります。そのような視点から、八戸工業大学のAIを活用して分析を行う研究者や、興味を持つ人材と連携し、時間をかけて、美術における評価というものを追究するフィールドとして八戸市美術館を活用していくことは、人材育成や地域発信においても相乗効果があるのではないかと感じております。また、アートファーマーのアンケートも非常に貴重な資料だと考えています。「やる気になった」「チャレンジしたくなった」といった声こそが、評価の現れでもあり、来館者だけでなく、参加しているアーティストや当事者たちの声をアンケートとして収集していくことも重要であり、それが評価に直結するものと捉えています。藝大でも「参加型評価」という考え方を取り入れており、アートコミュニケーターになる前後で「自分がどう変わったか」を可視化していく取り組みをしています。そうした視点を取り入れることで、アートファーマーのアンケートは美術館の評価材料になるだけでなく、それ自体が広報ツールにもなり得ると感じます。例えば、アートファーマーが「美術館に関わってよかった」と思ったことを発信することが、そのまま美術館の魅力を伝える広報となり得ます。文字情報は読み取りづらいこともあるので、X（旧 Twitter）のように「よく使われた単語が視覚的に強調される」といった形式で、アートファーマーの「やる気が出た」といったフレーズが視覚化されると、アンケート結果がそのまま効果的な広報手段になる可能性もあります。さまざまな事業や資料がありますが、それぞれをうまく連携・統合することで、広報にも評価にもつながり、ロジックモデルとしても活用できる。さらには、専門性の高い大学との協働による研究フィールドとしても発展できると思います。先ほど漆畑委員からもお話がありましたように、子どもたちに絵を描いてもらう取り組みも、美術館の評価の一環になり得ます。子どもたちはアンケートで文字を書くのが難しいこともあるため、「よくできました」や「やった！」といった表現そのものが評価になるという視点を、もっと発信していければと思います。円グラフなどの定量的なデータでは見えてこない部分を、どうやって伝えていくかが、今後の大きな課題になるのではないのでしょうか。最後に、池田委員、県美の方での美術館における評価の取り組みについても、ぜひご紹介いただければと思います。

◆委員：

基本的には、当館ではそれほど積極的に、今回のようなロジカルな評価を実施しているわけではなく、美術館内に設置しているアドバイザリーボードで評価を受ける程度にとどまっています。また、アンケートに関しては、積極的に実施しており、件数としては多くはありませんが、海外のお客様のアンケートも取っています。青森県立美術館は観光施設としての側面が非常に強く、そうした観点からの評価手法を重視しています。八戸のアートファーマーのような取り組みは、非

常に素晴らしいと思います。当館にも、ボランティアではなく、サポートスタッフという形で美術館を支えてくださる方々がいらっしゃいますが、こうした方々の意見を取り入れていくことは非常に意義のあることだと感じています。美術館のサポートスタッフは、いわば美術館のファンであり、ファンクラブのような存在ですので、そういった人たちが積極的に活動に関わり、学芸員やスタッフと対話しながら美術館について理解を深めていくことで、より一層美術館を応援したいという気持ちになってくれると思いますので、美術館にとって非常に心強い味方になっていただくことはとても大事なことだと思います。八戸のアートファーマーの皆さんも、そうした意味でとても熱心に活動されていて素晴らしいと思います。一方で、青森県美の例で言いますと、時間の経過とともに活動がマンネリ化してしまったり、特にコロナ禍においては、外部との交流が難しくなり、資料整理などの内部作業が中心になってしまったりした時期もありました。そうした期間を経て、再び次のステップへと移行するにはなかなか難しく、また学芸員や教育普及スタッフが以前のように関わるのが難しくなっています。ですので、今後5年、10年と続いていく中で、活動がマンネリ化しないようにしていただけたらと思います。

◆委員：

全く今の議論とは直接関係ないのですが、以前から感じていたことを一つ共有させてください。来るたびに思うのですが、八戸市美術館は、スタジオも含めて、音がとても聞き取りやすいんです。声がしっかり届くというか、話す側も聞く側もストレスなくコミュニケーションができる、そういう印象があります。初めてこちらの美術館に入った際、音環境の良さに感動しまして、特にジャイアントルームの音響の良さに驚きました。講師の声が非常にクリアに届き、自分の発した声も相手にしっかり届いている感覚がある。だからこそ、多くの方がこの空間を使いたがるのではないかと考えています。一方で、「はっち」は、とくに1階の広場などは、非常に使いたい場所でありながら、音がうまく届かず、講演を聞いても内容が聞き取りづらいと感ずることがあります。建築における音の評価って、あまりしっかりと行われていないように思います。これまで多くの公共施設の整備が進められてきましたが、その中で音の問題は常に頭を悩ませるものでした。ワークショップなどで会話が必要になる空間においても、音が通らず、結果として円滑なコミュニケーションが成立しづらいという課題が何度もありました。ただ、こちらの美術館はそうした面において非常に優れており、私としては一つのモデルケースではないかと思っています。一对一や少人数、または数十人規模の場でも、心地よいコミュニケーションができるかどうかという観点で、建築的な評価がなされてもいいのではないかと考えています。どなたか研究してくださらないでしょうか。公共施設や公民館などでも、こうした音響面に配慮された設計が導入されれば、より多くの方がその空間を使いたくなるでしょうし、より豊かなコミュニケーションが可能になると思います。そしてもう一つ、ふと思ったのですが、障がいのある方々にとっても、こうした音の落ち着きや聞き取りやすさが、居心地の良さにつながっているのかもしれない。視覚や聴覚、体感的な心

地良さによって、自然とここにいたいと思える空間になっている可能性もある。これはあくまで仮説ですが、もしそれが実証できたなら、とても意義深いことだと感じました。

◆委員： 評価についてですが、私たちが子どもの頃は通信簿があって、1・2・3・4・5とか、優・良・可といった形で、ある程度の目安がありました。そういう具体的な基準があると、私たちにはすごくわかりやすいんですよ。私自身、若い頃に県の職員をしていた経験があるんですが、当時は評価調書をつくらなければならなくて、「あなた、この事業どこまで進んだの？」って聞かれたときに、「90%達成しました」と答えれば、「ああ、それなら順調だね」と、納得してもらえるんですよ。今回も、事前に資料を読みましたが、評価が概ね妥当と書かれているだけだと、なるほどねとは思いますが、人に説明するときにはやっぱりもう少し数字が欲しいなと感じました。たとえば市民の方に「美術館ってうまくいってるの？」って聞かれたときに、「通信簿で言えば4か5くらいかな」って言えたら、相手も納得しやすいんじゃないかと思うんです。もちろん、そんなふうに評価できるのかどうかはわかりませんが、私はそういう形の方がわかりやすく、伝えやすいと思いました。

◆会長： ありがとうございます。ちょうど時間となりましたが、今日は本当にさまざまな意見が出されましたが、音響の話も、あらためて言われてみると確かにそうだなと感じました。文化施設の中でも、音楽ホールなんかでは音響ってすごく重要ですよ。実際に、藝大の先生が、音響心理学という分野で研究されていて、音があることによって安心する、逆に不安になるといった効果があるということも知られています。このジャイアントルームの音も、何かこう、安心できるような効果があるのかもしれない。そういう意味でも、ぜひ工業高校の先生や専門の先生方にもお力をお借りして、評価につなげていけるといいですね。館長が建築家ということもありますし、音響に関しても知識をお持ちだと思いますので。こうした八戸市美術館ならではの魅力を、もっとみんなで共有できるような評価を進めていきたいと思います。私も大学で、評価に関わる機会が多いのですが、あるとき聞いた「評価って、評価する、されるではなく、お互いに価値を見つけていくことなんだ」という話がすごく腑に落ちました。まさにその通りで、この八戸市美術館でも、ただ評価するための評価ではなく、みんなでその魅力や価値を見出していくような、そんな評価のあり方を大切にしていけたらと思っています。それでは、以上で本日の委員会の議事を終了いたします。進行は、事務局にお戻しいたします。

○事務局： それでは、事務局の方から事務連絡をしたいと思いますが、その前に令和6年度の報告で、皆さんにご紹介しそびれてしまった素敵な取り組みが一つありましたので、ほんの30秒ほどで結構ですので、少しだけ耳を傾けていただければと思います。大澤さんから、デイサービスセンターとのやり取りについて、少しご紹介していただきたいと思います。

○事務局： 昨年、ジャイアントルームでエンジョイ！アートファーム!!を開催していた際、近

隣のデイサービスの方々と何かご一緒できないかと思い、試しに2回ほどお招きしたことがありました。美術館のすぐ近くに、みやぎ会さんのデイサービスセンターがありまして、そちらの方々に声をかけました。そのときに、ちょうど今月がお誕生日というおばあちゃんたちに来てもらい、私が担当していた写真家の蜂屋さんをお願いして、そのおばあちゃんとお話をしながら、展示していた漆畑委員の絵の中から気に入った作品を一つ選んでもらって、それをイーゼルに飾って横に座り、素敵なお誕生日記念の写真を撮りました。とても喜んでいただきましたし、私たち自身もいろいろと気づかされることがありました。先ほど音響の話も出しましたが、この美術館は段差もなく、南エントランスに車をつければ、あまり歩かなくてもジャイアントルームまで来られますし、コレクションラボの展示にもすぐに入れる。こういう距離の短さや動線のわかりやすさは、八戸市美術館ならではの特征だなと、改めて実感しました。ですので、デイサービスの皆さんにとってのちょっと出かけてみようかという外出先の一つとして、また施設の中だけを歩くのではつまらないというような場面でも、美術館でちょっと特別な体験ができる、そんな可能性があるんじゃないかなと感じました。今年はこの取り組みを、もう少し広げて展開していけたらと考えています。

○事務局： それでは委員の皆さん、本日は貴重なご意見いただきましてありがとうございます。第2期中期運営計画（案）、そして令和7年度事業計画（案）についてご了承いただきましたので、この内容で進めさせていただきます。今年度は3回開催させていただきましたけれども、来年度につきましては10月と来年3月の開催を予定しております。詳しいことはまた近くなりましたらご連絡させていただきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局： それでは、委員の皆さま、長時間にわたりまして誠にありがとうございました。本日の会議はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。